

---

# Last witch

神崎ミア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Last Witch

### 【Nコード】

N7619V

### 【作者名】

神崎ミア

### 【あらすじ】

仮想都市ビライドは特殊能力を持った人間の進化種、ミュータントを中心とした4種族からなる世界。その一番古い種族である魔女の血を引く少女、シエリル・バウスフィールドは祖母である古の魔女、エミリアからその魔術の叡智すべてを受け継いだ最後の魔女だった。彼女の持つ叡智を求める者、その対立の先に待つ彼女の運命とは…。

## プロローグ

大お祖母様のお言いつけ、みだりに人前で力を使つてはいけない。その力はこの世界の根底を乱し、争いを生み、命を奪うもの。決して誰かを救うための力ではないということ。身に余る強大な力は、自分を滅ぼすということ。私はそれを16年間心に刻んで生きてきた。

### Last Witch

空中に浮かぶ都市、ビライド。その都市は四つの種族からなる世界。まずビライドの頂点に君臨するのは人間の進化種であるミュータントと呼ばれる種族。姿、形、全ては人間と差異なく、彼らは人間ならざる力を持っている。時に念力であったり、時に時空移動であったり。

そうしたミュータントがこのビライドの力では一番上の存在で、ミュータントであれば政治家などに優遇されることがある。

次に古の血族と呼ばれる種族。彼らはたった一人の魔女、エミリア・オルブライトから枝分かれした血を別けた種族。しかしながら混血も存在し、彼女が広めた魔術を人間に教えた者もいたため、彼女が指し示した古の文字が解読できるものをそう呼ぶ。

その次に人間。特にたる能力も持たないが、その高い頭脳を生かし、技術開発、医療などの前面を担っている。また軍人もミュータントに比べて人間が多い。そして数はミュータントの倍以上はいる、ありふれた種族だ。

最後に、ミュータントとしての能力を限界まで引き出し、既に人型を保てなくなつた劣悪種。主に能力の異常変異が原因の為、ミュータントから劣悪種が生まれることも少なくない。そして彼らは殆ど自我を失つており、もはや人間ですらない。しかしながら年々その数を増やし、ビライドの街を闊歩し、危害を加えているようなら駆除されている害獣にすぎない。

そんな四つの種族が互いにより干渉しあふことなく、己が能力をそれなりに使つて助け合いながら生きているのが、この空中都市、ビライドなのだ。

シエリル・バウスフィールドは孤独な少女だった。

彼女の母親は彼女が生まれたばかりの頃に病気で他界し、唯一の父と、祖母は数年前、とある事件によって命を落としてしまい、彼女は一度に天涯孤独と成り果てた。

しかしながら、彼女の両親、そしてその家系は古の血族であり、ビライドでは優位種族であるため、彼女の生活に不自由はなかった。決まった時間に起床し、一人つきりでは広すぎる豪邸から出て学園に通い、適当に授業をやりすごしては再び帰宅し、このサイクルを続けている。

彼女の従者である青年、カルクは彼女の鞆を静かに差し出して机に頬杖つく彼女を見つめた。不機嫌だ。そう思った。

「いかなさいましたか、お嬢様」  
「もしかして…忘れてないわよね？」

念を押すように、分かっているだろうというように尋ねられた言葉に、カルクはすぐに何を指しているのか気がついて頷く。明日は彼女の17回目の誕生日なのだ。

シエリルはカルクから渡された鞆に頸をのせ、大げさにため息をついた。この屋敷で働いているのはこの従者の青年カルク、執事のアレクシス、メイドが三人、家庭教師の老人が一人。計6人となる。彼女には目立つた友達もいないため、毎年の誕生日は憂鬱だった。シエリルの両親がまだ存命だった頃は、沢山の従者が住むにぎやかな屋敷だったのだが、父と祖母の死から、シエリルは自らの選択でこの6人以外を解雇してしまったのだ。自業自得といえそうである。

「…でも、いいわ…。明日学園の委員作業があるもの…遅くなるし」  
「ではせめてご夕食だけでも華やかにさせて頂きますよ、お嬢様！」  
「わがまま言ったわ、ごめんなさい。ちょっと構ってもらいたかっただけだから別に気を遣わなくていいわ」

カルクは内心、彼女を不憫に感じていた。

カルクはこの屋敷に、身寄りがなかった少年時代この屋敷の主である彼女の父に拾われて住み込みで働くことになったのだ。彼女の父に恩があり、また彼も父親同様慕っていたためその死から三年経った今でも受け入れられずにはいた。まるで自分の心境を重ね合わせるように、カルクはシエリルを見つめているのだ。一度大きく首を振り、カルクはそんな考えを跳ね除ける。

「…朝食、今持って参ります。ご夕食の事も私がしたくてすることですの…」

「そう、…なら任せるわ」

言葉と共に溢れ出たため息は、ダイニングに反響してすぐに掻き消えた。カルクは一度礼をして、その場を後にする。

シェリルは誰もいなくなつたダイニングで窓の外に鳥が羽ばたく様子をじっと見つめて指先を動かす。小さな音と共に窓が独りでに開いて、やんわりと冷たい風が室内に流れ込んだ。

「おばあさま…、私はあなたが亡くなつただなんて…まだ、信じられません…」

シェリルは一度、背を向けていたダイニングの肖像画に振り返る。美しい笑みを湛えた女性が描かれている。

彼女こそ古の血族の創始者、エミリア・オルブライトである。

指先に込めた魔法の粒と、その肖像画を見つめながらシェリルは目を閉じた。今でも鮮明に残る、祖母の姿を。

## 第一章 魔女狩り

シエリルの日常は、17年間変わったことがなかった。しかしそれは祖母と父が亡くなる三年前からじわりじわりと変わりつつあり、その原因の一番は祖母が亡くなったこと。つまり、シエリルの安寧は祖母であるエミリアによって守られていたということだ。

屋敷に一人きりとなつてからは、父の兄やら、母の妹の娘やら、見たことも会つたこともない親戚が押し寄せては、どうだろうか、一緒に住まないだろうかと優しい声を掛けてゆく。

そしてシエリルはその旅、その言葉の背後に遺産を見つめる視線を感じて首を振ってきた。

シエリルが住まうバウスフィールド邸には、まだ成人もしていない少女が抱えるには大きすぎるほどの莫大な遺産の他に、祖母が残した叡智の断片と呼ばれる魔術書が残されている。

古代文字を解読ができる古の血族の中でも、本当に濃い血を別けた者だけが解読することができると言われる、黄金にも代えられない大切なものだ。勿論シエリルは叡智の断片の全てを把握している。

幼い頃より、シエリルはエミリアから教育を受け、その才能が相まつてか魔術は自由にその小さな手の平に操られていた。

エミリアはミュータントがこの世界を統べる前に、シエリルにこんなことを言った。

「シエリル、この世界には新しい何かが生まれる。それはお前にとつて良くも悪くも必ず関わってゆくだろう、お前はお前の意志でこの叡智を求め、使役なさい。ただそれが正しいことなのか、よく考

えることだ」

シエリルはその意味をしつかりと理解してはいなかったが、祖母が言うことは必ず頷き心に留めた。

そうして今、祖母がいない世界でその意味を改めて考えるのだ。

「シエリル」

屋敷から出て、学校へ向かうシエリルを止める声があった。

シエリルは声に反応して一度足を止めたが、また再び歩き出して振り返ることはしない。

声を掛けた男は尚も、シエリルの名を呼んだ。

「おいシエリル、シエリル！」

「…何の用です叔父様」

赤茶をした髪があらゆる方向に好き勝手はねていて、身を包むその服装は質素。よれよれのシャツに僅かにシミが滲んでいる。脇には今朝の新聞を抱えて、片手を大きく振りながらシエリルの後を追う。

「はは、足が速いな、おじさんついてくだけで息が切れちゃう」

「……お金が必要なんですな」

「…いや、参った参った…」

シエリルは深くため息をつき、叔父である背後の男にようやく振り返った。

「一体いつまで私につきまとうんですロイズ叔父様。お金が必要な



からお仕事してらしているんですからご自分でまかなって下さい、独身なのですし」

「やあ、シャルロット。おじさんこう見えて借金しているんだ、お金ないんだよお」

「こう見えてもどう見えてもそんなことは一目瞭然ですが、あなたの借金を払ってやるほど、バウスフィールド家は甘くありません、どうぞお引取りください」

ツンとした態度を貫き、その一言だけ返すとタクシーを拾おうかとシエリルは辺りを伺った。ふとそんな何気なく遣った視線の先、見慣れた黒のフード姿の人物を二人見つけ、シエリルは一瞬、息を止めた。

(ブラックファイア…！)

どうやらシエリルの家を捜しているらしい。きよろきよろと落ち着き無く視線を遣る二人組。その服には大きく、炎を象った紋様が描かれている。ブラックファイア、魔術を粛清するミュータントで構成された組織。シエリルはすぐさま叔父であるロイズの首根っこを引っ張って屋敷に逆戻りした。

「な、なんだいシエリル。もしかして…おじさんにお金借してくれるのー？」

「馬鹿言わないで下さい、ブラックファイアが屋敷を見張っていたんです」

幸い、この屋敷にははっきりとした血族でなければ入れない特殊な魔法がエミリアによって施されている為、いくら超現象が起こせるミュータントといえど目にするこすらできない。

「ブラックファイア…」

「まさかあなたの差し金じゃあないですよね？」

「ははは、おじさん信用ないなあ」

「…当然です」

諦めたのか、姿を消した二人組みに安堵の息をつき、シェリルはゆっくりと立ち上がる。

「ブラックファイア…面倒な組織…」

## 二話

「エリア七千六百地点、午前、十時と十二分七秒。ターゲット、見失いました」

「なーんだかなあ」

シエリルの邸宅から少し離れた屋外。黒衣を纏った二人組みが辺りを見渡していた。その片方は通信機で連絡を取り、もう片方は腕を組み、諦めているかのような口調で呟いた。

「古の魔女はもう死んでるんだしさあ、こんなに血眼になることないじゃん？アタシさあ、別にやりたくてこんなことしてるわけじゃないしい」

「通信、終了しました。任務失敗、ただちに帰還姿勢を取るべきかと」

「…はあ、アンタとアタシじゃまともな会話もできないし」

通信機を切った片方の女は、悪態をつく少女を一瞥して手のひらを大きく地面へとかざした。

すると地面に突然黒い弧が描かれ、その黒い弧にきれいに重なるように深く暗い穴が突如出現する。少女の方は気に食わない様子で女を見つめていたが、やがて何を言うでもなくその穴に飛び込んでゆき、女も続いて穴へと飛び込む。

女のフードが完全に漆黑へと飲まれると、穴はあつという間に地面へと戻り、何事も無かったようにその場所にはすつと風が吹き抜けていった。

その後、ブラックファイアの動向を暫く伺っていたシエリルはもう完全に人影が無くなったのを確認して屋敷から数歩歩き出す。背後に張り付いていたロイズはそんなシエリルの横顔を見つめてまるで自分が危ない目に遭ったかのように小さく安堵のため息をついた。

「いやあ危なかったね、シエリル。オジさんドキドキしちゃった」  
「あなたのお陰でつまらない時間を過ごしてしまいました」

そう悪態をつきつつ、シエリルは胸元から小切手を取り出し自分のサインを素早く書くと押し付けるようにロイズに突きつけ、髪を払った。

ロイズは小切手を落とさないようにしっかりと両手に抱え、シエリルを見遣る。

「それだけあれば借金も返せばらく生活もできるでしょう。失業しているわけではないのですから、これ以上バウスフィールド家には関わらないで下さいますか」

「こんなに大金…なあシエリル俺はお前を」  
「それでは私はこれで失礼します」

ロイズの一言を、既に悟っているかのように、はたまた聞く気が全くないように、シエリルは自分の言葉でかき消して歩き出した。付いて来られるのが面倒だと感じたのか、小さく唇を動かして言葉を

口にすると、ずっとシェリルの体は霧散してしまい、ロイズは伸ばした手のありかを探すように一度拳を握り、深くため息を吐き出した。

彼女の周りには常々、彼女の財産を求めて親戚と一緒に住むことを進言している。

魔術の全てを把握しているだけあつてか、賢い彼女は全くそれらの言葉を信用することなく、指先でつま弾くように親戚たちを跳ね除け、一人、彼女には広すぎる豪邸で暮らしている。

ロイズは全く信用のない自分が、彼女と暮らしたいと口にすることがどれほど浅ましく見えるかを考え、冷たく接する彼女に心を痛めていた。

手のひらに握らされた小切手に力を込め、ロイズは項垂れる。

彼女と暮らしたいという気持ちに下心がないにせよ、その手に握られた大金は結局の所、彼女を裏切っているのだ。

ロイズはシェリルの邸宅を眺め、背中を丸めて歩き出す。 出社時刻はとつくに過ぎていた。

学校に着いたシェリルは、誰も自分が突然この場に現れた所を見ていないか確認をし、平静を装ってまるで歩いてきたかのように門まで悠然と歩いていった。

彼女は自分が魔術を使える古の種族であることを公言せず、極力魔法は使わないように祖母に言いつけられていた。

先ほどのブラックファイアがいつ何時、魔術を使える者を狙うとも分らないし、魔術は多かれ少なかれ、人を不幸に陥れるように出来ている、そう教わっているのだ。

ミュータントの特殊能力と違い、代償がいる力であること。その代償は自ら望んだものになるとは限らないことをきつく言われているのだ。

シエリルが玄関口まで歩いて行くと、ふと、人ごみが出来ているのに気がつき、歩みをゆっくりとした速度に変え、やがて立ち止まる。人ごみの真ん中の人物は、エントランスのど真ん中で一段、階段に足を掛けて何かを語っている。

普段こう言ったアクセントなどに首を突っ込みたがらないシエリルではあったが、場所が場所な為、足止めされて聞き入れれば、すぐにその場に居なければならぬとすら思える理由となった。エントランスの真ん中で両手を広げている少女は、高らかに宣言する。

「私はこのビライドの優劣に疑問を抱きます。この世界で一番の能を持つのは古の種族、つまり魔術という至高の叡智を物にする者。この私がそうであるように」

シエリルは耳を疑う。彼女は一体何をのたまっているのか。一瞬停止した思考回路は彼女の存在を脳内から叩き出す。勿論、親類ではない。魔術の叡智を把握できる伝えられたもの、シエリルは苦い表情をして彼女を見つめる。

どよめく観衆はそれぞれの思いを口で、あるいは胸で呟きながらただ一点、古の種族と自称する少女を啞然として見つめるのであった。そう、シエリルと同じように…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7619v/>

---

Last witch

2011年10月29日02時18分発行